2 資産に含まれる文化財

① 整理票

区分	名　称	概　　要
覆下栽培における茶生産の展開	宇治市域の宇治茶の生産景観（中宇治・白川） ※一部、文化財保護法による重要文化的景観に選定	・てん茶（抹茶）及び玉露など、茶畑に覆いをかけて栽培する覆下茶園による茶栽培をおこなう茶畑が点在するとともに、室町時代末期以来の歴史を誇る茶問屋が立ち並ぶ地である。 ・宇治では鎌倉時代から茶が栽培されており、16世紀後半より覆下栽培が開発され、白川では伝統的な本簀及び寒冷紗による覆下茶園が営まれている。宇治川は源流が琵琶湖にあるため土砂の流入が少なく、粘土質に近い赤土で育った茶は、竹のような浅い緑になる。（このようなてん茶（抹茶）の色を「竹の緑」と呼ぶ。）中宇治には、抹茶などの高級茶の製造と販売を独占した宇治茶師の屋敷をはじめとする茶問屋の町並みが残る。 ・宇治市域には、宇治茶の歴史が、宇治川を中心として形成された風土の中に体現され、文化的景観のまとまりが形成されている ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	城陽市域の宇治茶の生産景観（上津屋） 八幡市域の宇治茶の生産景観（上津屋、野尻、岩田）	・17世紀中期には茶園があったことが確認されている。 ・現在「てん茶（抹茶）」の産地として知られる。19世紀以降、覆下栽培が木津川河川敷に拡大したが、本地区はその典型例である。河川敷の平坦な砂地を利用し、伝統的な本簀及び寒冷紗による覆下茶園で生産される砂混じりの土で育ったお茶は、直根が地中深く入り松のような濃い緑になる。（このようなてん茶（抹茶）の色を「松の緑」といい、浜茶と呼ばれている。） ・木津川沿いは、洪水時に上流から流されてきた土が柔らかい層を作るため、根がはりやすく、水はけがよいので茶の栽培に適している。 ・河川敷近くの集落内には茶工場建築物も点在し、自然（河川）と生業、生活が密接に関連する文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	京田辺市域の宇治茶の生産景観（飯岡）	・飯岡地区は玉露産地として知られる。 ・木津川左岸の独立丘陵に集落が立地し、丘陵周辺の低地には水田と畑地が、丘陵には集落と覆下栽培の茶園、そして竹林が広がっている。集落内には茶工場建造物も点在する。河川と平地、丘陵といった地形の違いをうまく利用した土地利用が展開している。 ・また、丘陵頂部には京都府南部の山城地域を代表する古墳群が位置しているなど自然・歴史・生業の各側面で特徴的な要素を備えており、小規模ながら明瞭な文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
露地栽培における茶生産の展開	宇治田原町域の宇治茶の生産景観（湯屋谷、奥山田、郷之口）	・宇治茶の煎茶生産史上の核をなす地域である。 ・奥山田、湯屋谷は、鷲峰山北麓の谷筋に展開する集落で、奥山田大福谷で江戸時代前期までには茶栽培が始められ、湯屋谷では永谷宗円によって青製煎茶製法が開発された。宗円は江戸への販路開拓も成し遂げたため、谷深い地ながら茶農家だけでなく茶問屋も軒を連ねる集落形態が生まれた。 ・茶園は谷沿いの水田脇に設けられた原形というべき茶園景観にはじまり、戦後には大福に大規模な山なり茶園が開かれ、寒暖の差の大きい気候を活かした香りのよい煎茶が生産されている。 ・また、郷之口は、陸上及び水上交通の結節点に発達した茶問屋街で、間口の狭い町家形式を持つ明治以降の茶問屋が建ち並ぶ。 ・自然条件を活かしつつ、生産と流通に独特の個性を持つ、文化的景観としてのまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。

評価基準

（iii） 文化的伝統や文明の存在を伝承する証拠で希有な存在：「緑茶生産の伝統と革新の歴史」
（iv） 歴史上の重要な段階を物語る景観の類型：「日本茶生産の景観の類型」
（v） ある文化を特徴づける土地利用形態の見本：「日本茶生産を特徴づける土地利用」
（vi）人類の歴史上の顕著な普遍的意義を有する出来事や伝統、思想、信仰、芸術との関連：「国民諸階層を対象とした緑茶の喫茶文化の形成に大きく寄与」

区分	名　称	概　　要
露地栽培における茶生産の展開	和束町域の宇治茶の生産景観 （原山、釜塚、石寺、撰原、湯船）	・和束町は、現在、京都府内でもっとも茶生産量が多く、京都府を代表する茶生産地である。 ・鎌倉時代に鷲峰山山麓に茶を栽培したのが始まりと言われ、16世紀後期には、原山に茶園を開いた記録や宇治製法が開発されてから約10年後に原山に伝えられたとあるなど、古くからの煎茶産地である。 ・明治以降、集落裏側の山腹を山なりに開墾するなかで一大産地へと展開していった。なかでも、原山、釜塚、石寺及び撰原の各地区では、集落と茶園の織りなす良好な文化的景観がみられ、京都府の文化的景観に選定されている。 ・湯船は、茶工場は住居施設を２階に付設するなど独特の外観と建築構成を示し、規模も大きく集落景観において重要な位置をしめている。しかも、茶工場に加え、茶畑での農作業に不可欠な雪隠や風呂場、あるいは井戸屋形などが屋敷の周囲に配置されていることも、集落景観を特有のものにしている。 ・湯船地区は、伝統的民家に加え茶工場が多く残り、宇治茶の生産集落としての特徴をよく示し、宇治茶の生産集落を代表する地区として価値が高い。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	南山城村域の宇治茶の生産景観 （田山、高尾、童仙房、今山）	・木津川水運を背景に、幕末からの煎茶の輸出を契機として、茶園を徐々に拡大してきた生産地である。 ・村の南半に所在する田山、高尾では、縦畝の茶園景観が際立つ。山中に山なりに開墾された緩勾配の茶園が点在し、それらを縫うように畝が縦断する様は、宇治茶生産の景観中でも特筆すべき眺めである。縦畝は乗用型摘採機の導入にも適しており、生産の合理化と伝統的な景観とが両立してもいる。 ・昭和44年の高山ダム建設に伴い造成された今山では、他の地区には見られない平坦な露地茶園が広がる。 ・また、童仙房は標高500mの山間の平坦地に明治初期に開墾された集落で、水田と山なり茶園が対をなす、素朴な景観が残る。 ・明治以降における宇治茶生産の歴史と独特の風土が織りなす文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	木津川市域の宇治茶の生産景観 （上狛）	・上狛には、木津川水運を利用した交通の結節点である地の利を活かした茶問屋街が形成されている。 ・綿業を商っていた家々が、幕末からの煎茶の輸出拡大にともない、順次茶問屋へと転換し、発展したもので、奈良街道に沿って広い間口を有する茶問屋が立ち並ぶ通り景観を見せる。 ・現存する茶問屋の建物は、幕末建設のものから、販路が国内向けとなった大正、昭和初期に建設されたものまで多様に残る。広い間口を活かして長屋門を構え、中央の庭を茶工場と主屋が囲む、明治以降に発展した茶問屋らしい合理的な配置をみせる。 ・自然、歴史、生業に特徴的な要素を備え、文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（v）（vi）を示す代表事例。

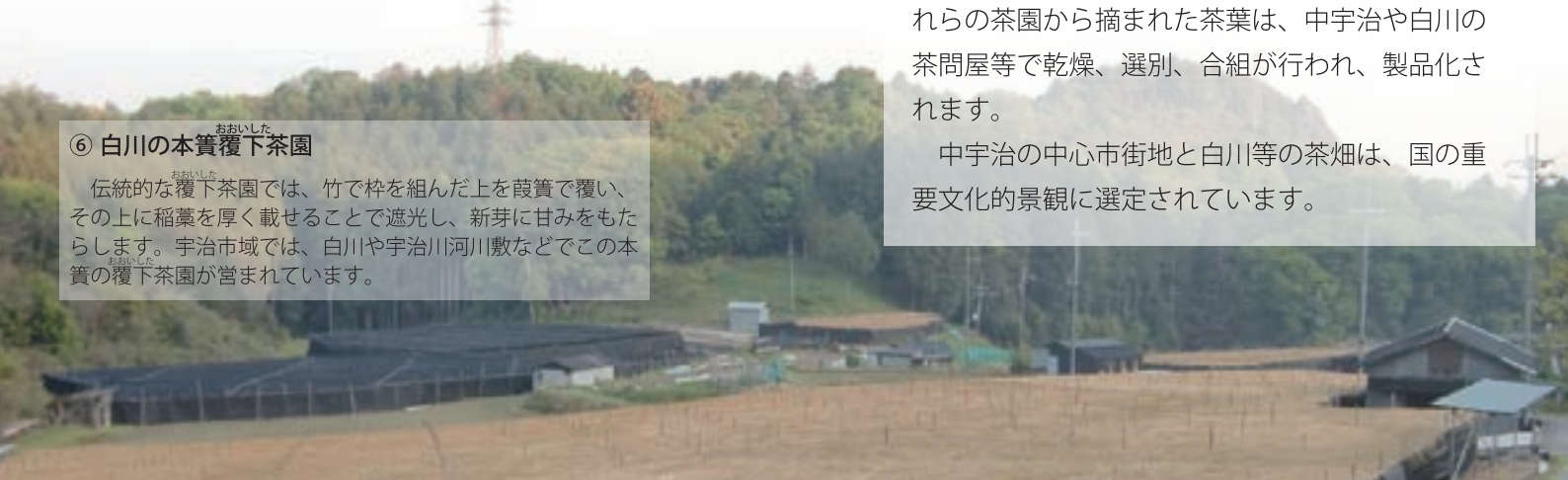
② 構成要素ごとの位置図と写真

宇治市域の宇治茶の生産景観

中宇治、白川

⑤ 拝見窓が復原された茶問屋

宇治市の茶業の中心地である宇治橋通りでは、独特の歴史と景観の価値を活かした重要文化的景観の整備と活用が進められています。平成 26 年 3 月には、茶問屋の旧焙炉場の修復が竣工し、茶の選別をおこなう拝見窓が復原されました。



⑥ 白川の本簀覆下茶園

伝統的な覆下茶園では、竹で枠を組んだ上を葭簀で覆い、その上に稲藁を厚く載せることで遮光し、新芽に甘みをもたらします。宇治市域では、白川や宇治川河川敷などでこの本簀の覆下茶園が営まれています。

概要

宇治市域は、てん茶（抹茶）及び玉露など、茶畑に覆いをかけて栽培する覆下茶園による茶栽培をおこなう茶畑が点在するとともに、室町時代末期以来の歴史を誇る茶問屋が立ち並ぶ都市景観を有する地です。宇治の茶栽培は、鎌倉時代に始まる長い歴史を持ち、16世紀後半に他地域に類をみない**覆下栽培の方法が開発**され、質の高いてん茶などを生産してきました。また、同じ頃から**茶業を取り仕切る茶師**が頭角を現し、江戸時代を通じて抹茶などの高級茶の製造と販売を独占し、宇治独特の茶文化を育みました。中宇治には、茶師屋敷をはじめとする**茶問屋の立ち並ぶ活気のある町並み景観**が現在も見られます。

宇治川河川敷や、中宇治から山一つ隔てた白川の地では、**本簀及び寒冷紗による覆下茶園**が営まれており、てん茶や玉露が生産されています。これらの茶園から摘まれた茶葉は、中宇治や白川の茶問屋等で乾燥、選別、合組が行われ、製品化されます。

中宇治の中心市街地と白川等の茶畑は、国の重要文化的景観に選定されています。

中宇治

長い歴史を持つ抹茶生産の中核をなす市街地です。宇治橋通りを中心に、戦国時代からの宇治茶業を取り仕切った茶師の旧宅や茶問屋、茶農家が立ち並び、茶の製造と販売をおこなう茶業街を形成しています。市街地の裏手には、かつては扇状地の地形を利用した覆下（おおいした）茶園が広がっており、現在も市街地内や宇治川河川敷、段丘上などに茶園が営まれています。

① 宇治橋三の間から望む宇治川の景観

琵琶湖に発する宇治川は、宇治で丘陵から平地に流れ出ます。この地形変化は、扇状地の地質や朝霧のかかる気象を生み、古くは平安貴族に愛され、新しくは宇治茶生産の展開の源となりました。

② 宇治川河川敷の覆下（おおいした）茶園

宇治川河川敷では豊臣秀吉が宇治川の大規模な河川改修を行った際に築いた太閤堤が発見され、国史跡に指定されています。その直上には、河川敷の水はけの良い土壌を利用して、本簀及び寒冷紗の覆下（おおいした）茶園が営まれています。

③ 宇治橋通り商店街と茶問屋・茶農家

メインストリートの宇治橋通りには、戦国時代から茶師屋敷が立ち並び、現在も複数の茶問屋と茶農家が並びます。この歴史は、町家の軒が道路内に大きく張り出す独特の空間利用に刻み込まれ、通りの景観を個性付けています。

④ 茶工場の煉瓦造乾燥炉

宇治橋通りの町家の奥には、抹茶の原料となるてん茶を製造するための煉瓦造の乾燥炉が現在も現役で稼動しています。中宇治独特の奥行きの深い敷地形状を利用して、10mを越える長大な乾燥炉が設置されています。

⑥ 覆下（おおいした）・露地茶園の景観

白川の最奥、上明には、本簀を含む覆下（おおいした）茶園と露地茶園が谷を埋め尽くし、柿の木が彩りを添える、桃源郷のごとき茶園景観が広がります。

⑦ 白川金色院の坊に由来する棚田

覆下（おおいした）茶園には大量の稲藁が必要となるため、茶園には水田の存在が不可欠です。白川の棚田は、白川金色院の十六坊跡に営まれており、古くに引かれた水系を利用して水田化されたものと考えられます。

⑧ 茶農家の集落景観

白川の集落では、敷地内に茶工場を有する茶農家が、通りに沿って立ち並びます。古くは通り沿いに茶工場を構えましたが、昭和初期以降になると敷地奥に茶工場が引き込まれ、大型化します。

白川

中宇治から山一つ隔てた谷筋に展開する茶生産集落です。12世紀初頭に創建された白川金色院を中心に、16の坊が営まれた地で、これらと入れ替わるように、江戸時代に茶生産集落が発達しました。谷筋を埋めるように覆下（おおいした）茶園や露地茶園が広がり、柿の木や棚田とともに、宇治市域の茶園の原型ともいうべき茶生産景観が残っています。

城陽市域の宇治茶の生産景観

上津屋

③ 木津川河川敷に広がる覆下茶園

木津川右岸の河川敷には、水はけの良い砂地を利用して、本簀や寒冷紗を用いた覆下茶園が広がっています。

概要

城陽市の市域東部は山地が広がる一方で、中央から西部にかけては広く平地が形成されています。宇治市域に隣接していることから、早くから茶生産が伝播し、17世紀中期には市域に茶園があったことが確認されています。

上津屋は、城陽市域の北西端にあたる地区です。木津川のすぐそばに立地しており、**河川敷には本簀や寒冷紗を用いた覆下茶園が**広がっています。覆下栽培は19世紀以降に宇治から木津川流域に広まりましたが、本地区はその典型例となっています。河川敷の平坦な砂地を利用した覆下茶園で生産されるお茶は、松のような濃い緑をもつ独特のお茶となり、現在、上津屋地区はてん茶（抹茶）の主要産地の一つとして知られています。

以前は、対岸を結ぶ渡船の発着場もありました。その袂に展開するのが上津屋集落ですが、**集落内には茶を加工する茶工場建物も見られ、**河川敷の茶園との一体性がうかがえます。

木津川という自然条件をうまく利用して茶園・集落が形成されている点が見所です。

① 上津屋の集落

木津川右岸の堤防に隣接して集落が立地しています。昔は渡船場でもありました。集落の周囲は水田・茶園が広がります。

② 茶工場

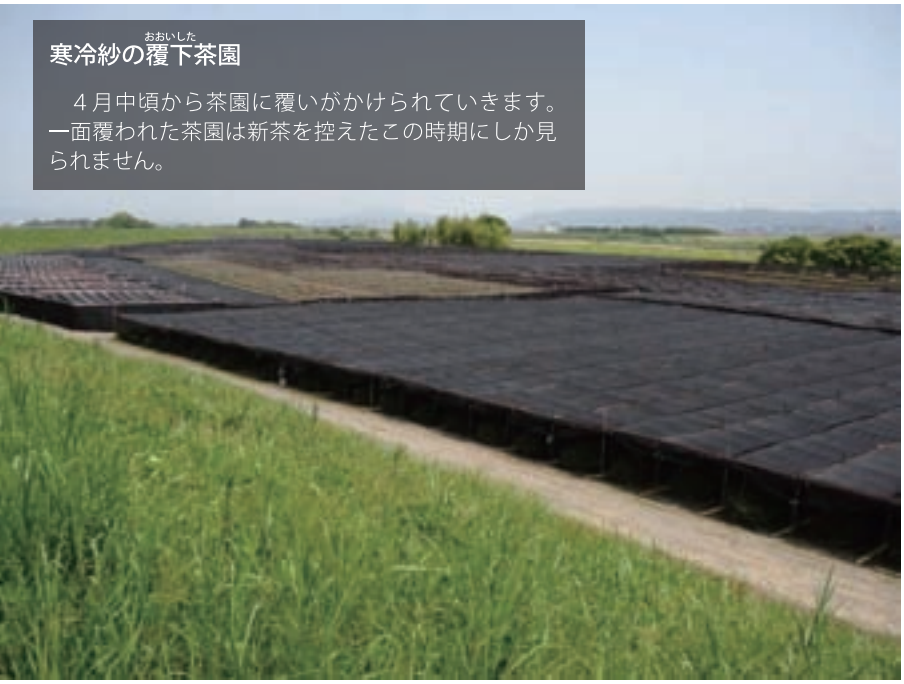
上津屋集落を歩くと、茶工場として利用されていた建物を確認することもできます。

八幡市域の宇治茶の生産景観

上津屋、野尻、岩田

上津屋の覆下茶園

木津川河川敷に寒冷紗を備える覆下茶園と流れ橋が特徴ある景観を見せます。



寒冷紗の覆下茶園

４月中頃から茶園に覆いがかけられていきます。一面覆われた茶園は新茶を控えたこの時期にしか見られません。

概要

八幡市と城陽市境を流れる木津川沿いに茶園が広がります。木津川の河川改修の歴史の中で堤防が後退し、現在は堤防内に茶園が位置しています。

木津川河川敷は砂地であり、砂地での茶栽培は、抹茶の原料となるてん茶の栽培に適しているとされ、古くから巨椋池の周辺で広がっていました。山間部で栽培されるお茶を「山茶」と呼ぶのに対して、水辺の砂地で栽培されるお茶は「浜茶」と呼ばれ、山茶よりも緑色が濃くなることで知られています。

八幡市でも主にてん茶の栽培がされており、流れ橋の上下流に広がる上津屋・野尻・岩田地区の覆下茶園は、特にその景観をよく表しています。

覆いを被せて育てる覆下栽培では、茶の木に係る負担も多くなるため、比較的多くの施肥が必要となりますが、京都から水路を通じて運ばれる糞尿を活用しやすいことや河川の氾濫により上流からの肥沃な土壌の流出がそれを賄うという地理的条件も栽培に適していました。

京田辺市域の宇治茶の生産景観

飯岡

③ 丘陵の地形を活かした飯岡の土地利用

河川沿いの独立丘陵という独特の地形を巧みに利用して、茶園や果樹園、竹林と集落が丘陵を覆い尽くすように展開しています。

概要

京田辺市飯岡（いのおか）地区は木津川左岸に隣接して位置します。**地区の中心には標高67mの低い独立丘陵**がありますが、周囲は木津川によって形成された平地のために、よく目立ちます。丘陵部には古墳群もあり、歴史的な重層性をうかがうことのできる地域です。

丘陵は竹林と集落、果樹園、そして茶園に利用されており、丘陵の周囲には水田が広がります。特に茶園では**覆下栽培（おおいした）による玉露生産**が盛んにおこなわれており、南山城を代表する産地です。

飯岡集落は丘陵に固まり、屋敷地は農作業にあわせた造りとなっています。なかでも作業小屋は、荒茶加工の場として、また収穫物の保管場所として、さらに茶摘み等の農作業の手伝い人の宿泊場所として、さまざまに利用されていました。

また、丘陵にある竹林は玉露生産に不可欠な覆棚をつくる材の供給地となっており、生業に不可欠な場所でした。

河川沿いの独立丘陵とその周囲の平地という、自然特性を巧みに利用しつつ、茶生産をはじめとした複合的な農業が展開することで、独特の景観を生み出しています。

① 茶工場

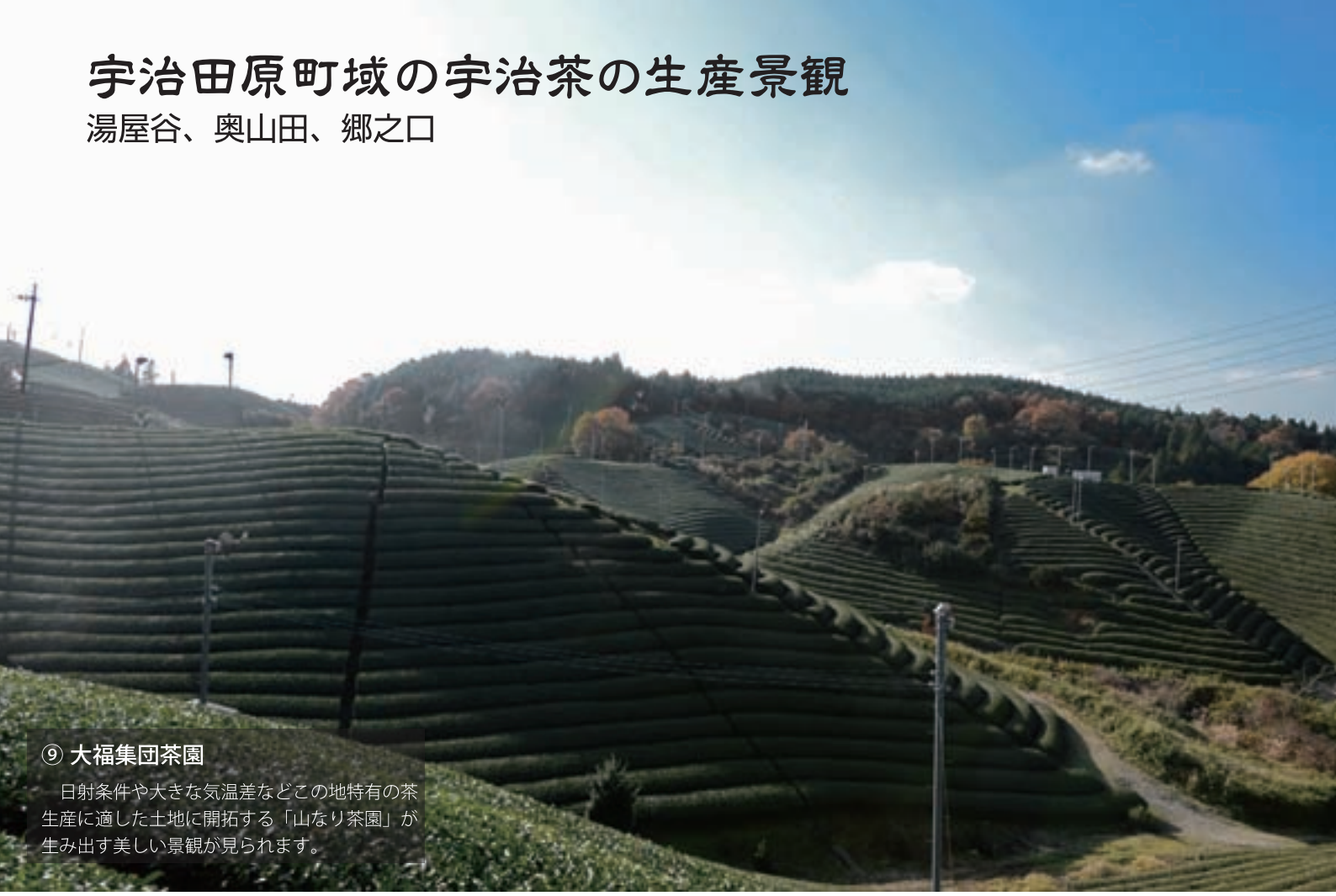
飯岡の集落を歩くと、茶工場として利用されていた建物を数多く見ることができます。

② 七井戸・古墳

集落内には七井戸と呼ばれる井戸があり、大切にされています。また、古墳時代前期～後期の古墳もみられ、歴史の重層性をうかがうことができます。

宇治田原町域の宇治茶の生産景観

湯屋谷、奥山田、郷之口



⑨ 大福集団茶園

日射条件や大きな気温差などこの地特有の茶生産に適した土地に開拓する「山なり茶園」が生み出す美しい景観が見られます。

概要

宇治田原町は信楽街道と田原川が交わる交通の要所として古くから栄えた地で、江戸時代に入り、永谷宗円等による煎茶製法の開発や販路拡大によって急速に成長し、煎茶生産の中核を成すに至った町です。

奥山田、湯屋谷は、鷲峰山北麓の谷筋に展開する集落で、奥山田大福谷で鎌倉時代初期に茶栽培が始められ、湯屋谷では**永谷宗円**等によって青製煎茶製法が開発されたと言われています。宗円は江戸への販路開拓も成し遂げたため、**谷深い地ながら茶農家だけでなく茶問屋も軒を連ねる集落形態**が生まれました。

茶園は谷沿いの水田脇に設けられた原型というべき茶園景観にはじまり、戦後には大福に大規模な山なり茶園が開かれ、寒暖の差の大きい気候を活かした香りのよい煎茶が生産されています。

また、郷之口は、陸上及び水上交通の結節点に発達した茶問屋街で、**間口の狭い町家形式**を持つ明治以降の茶問屋が建ち並びます。

茶の他にも古老柿という特産があり、その生産に使われる「**柿屋**」は水田や茶畑と合わせて独特の景観を見せます。

④ 茶宗明神社

永谷宗円を祀る神社で、湯屋谷の最奥に位置しています。地元とともに、京都府南部を中心とする全国の茶業関係者の寄進により建設、維持されています。